



1898年から1908年にわたって4度も全米オープンが開催された名門コース。難度の高いホールが続く。

狩猟クラブからはじまった同クラブでは、豊かな自然の中で今でもハンティングがおこなわれている。

カントリークラブは、単にゴルフ場という意味ではない。様々なスポーツを楽しむためにつくられた会員制のクラブおよびその施設だ。そして日本でも本格的な「世界基準」のクラブがお目見えしようとしている。「クラブ」の源流を求めてアメリカ・ボストンを訪ねた。

取材協力・マサ・ニシジマ 写真と文：田中克佳

### アメリカのカントリークラブの現在

Myopia Hunt Club



## 真のクラブライフを育む

—調和する伝統と革新



5



4

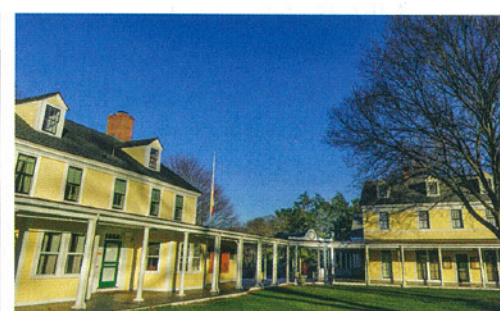


3

1.築240年以上の歴史を持つクラブハウス。かつての大荘園の母屋を改築したもの。2.クラブハウス内のリビングルーム。3.歴代のクラブ代表を写した写真。その多くがハーバード大学の卒業生で、「ファイナルクラブ」と呼ばれる超エリート学生が集まるソーシャルクラブに属していたメンバーだ。Myopiaがいかに上層階級の人々で組織されてきたかがうかがい知れる。4.敷地内には潇洒な馬屋が並び、乗馬のレッスンなどもおこなわれている。5.創設当時のコースはほとんど手を加えられていないままで保持されている。



2



1

### 世界基準の カントリークラブが 日本にも誕生

ゴルフの帝王、ジャック・ニクラスが名誉発起人を務め、ゴルフコースもデザインした世界基準の本格的カントリークラブ『東京クラシッククラブ』が2016年5月14日にオープンします。ダイナースクラブは、そのビジョンに賛同し、共に発展をもたらす原動力になりたいと考えています。詳しくは、東京クラシッククラブ事務局（電話03-6804-1606 <http://tokyo-classic.jp>）までお問い合わせください。

さらにカントリークラブの発展には、地元コミュニティとの共生が必要だとウェル氏は語る。「乗馬やハンティングには広大な領地が必要です。時に我々の活動はクラブの敷地を越え、周囲の州立公園や農場にまで及びます。彼らの敷地への立ち入りが許されるのは、普段から良好な関係を築いているからです」。周辺の土地所有者たちを招いて盛大なパーティーを主催する一方、クラブ内の施設を地元の高校生に開放するなど、コミュニティとの連携も欠かさない。地元で愛されるクラブとして綿々たる努力を重ねているのだ。メンバーの快適性と同時に周囲との共生にも細心の注意を払う、アメリカ流のクラブライフの神髄が根付いている。

一方、名門クラブであっても時代の趨勢には逆らえず、時には改革を迫られてきたという。「かつては圧倒的に男性優位のクラブで、女性や子供はクラブハウスにさえ足を踏み入れられない時代がありました。Men's Bar や Men's Dining などの名前が施設内に残っているのはこうした名残です……」。男性の、とりわけ年長者のメンバーは極めて保守的で、新たな施策や改革には消極的だった。しかし、現在では多くのメンバーがファミリーとしてクラブに参加しており、より門戸を開いたクラブ運営が必要だという。「伝統の保持と革新は常に表裏一体です。名門クラブとして時代に即した経営が求められています」。

ボストン郊外の「マイオピア・ハントクラブ (Myopia Hunt Club)」は140年の歴史を誇る名門カントリークラブだ。かつて全米オープンが開催されたゴルフコースを持ち、ハンティングやボロ、乗馬など、その活動内容は多岐にわたる（デジタル版シングレチャターで2回にわたり同クラブを紹介しています）。現在、アメリカには1万6000を超えるゴルフコースがあるとされるが、その中心にあるのがこうした複合型アクティビティを提供する「カントリークラブ」だ。所属するメンバーは豊かなクラブライフを享受し、スポーツやイベントを通じて社交を楽しんでいる。一方で会員には高い素養と志が求められ、地域社会への貢献やクラブの伝統の継承など、大きな責務を担っている。